



大成會席

新籙形

一

1707
13



13
1707
1



山本

横相



二席

謀くは不淨を支配する



まはるくもあふ不淨は名りんかんかたがいの
あまをたをたびあげ幣帛赤振丹
減を種てもいりうは道はかあらんや
あうあまをたきより影若地を
貧速く法人の口をのとひしんを
して真あまんを一と一集まを

朱の...

...

平よおはなをよまをに輝とれども
 吹のび好むる道とくもよとりのま
 としとまよよし空唯ううくを
 次をを定む是もたふしと
 輝ふらん流

景美亭

安永五のし

流水述

初冬物語



吐會六席目

菊花亭流水標

新撰新番組美を

目録

養頭	車	可儀	舟二	當	遠	心
舟三	舟三	舟三	舟二	舟二	舟二	舟二
當世反魂香	當世反魂香	當世反魂香	買か	買か	買か	買か
舟八	舟八	舟八	山と	山と	山と	山と
井戸の世蓋	井戸の世蓋	井戸の世蓋	大月	大月	大月	大月
舟七	舟七	舟七	舟八	舟八	舟八	舟八
地中の縁	地中の縁	地中の縁	舟八	舟八	舟八	舟八
舟七	舟七	舟七	舟八	舟八	舟八	舟八
舟七	舟七	舟七	舟八	舟八	舟八	舟八

十九	酒	角力	清雅	十軸	年ハ半	六花
十一	浮世仙人	柳巳	十二	縮	蛙	蛙
十三	管絃の秋	朱極	十二	五	吟	拈
十五	火を以て火	里谷	十六	秋	仙	子
十七	浪人の心	和是軒	十八	反	鬼	香
十五	花の浪	半煥	廿軸	一	百	膳
						七
						朱極

巻の目録の終

風車

コレ 孫あ喰よ来たも。フウ あ合や。イヤ 着後ひよ
 浴堂ふの。ウウ どんあ着や。ウイ 宿土のあ着よ。
 ヤア 姉のあう持のあまうひの。やと。のく。せ。の。履
 ば。ハ。テ。め。の。そ。ふ。あ。ま。ま。が。着。と。や。ま。う。の。あ。あ。ぬ。イ。ヤ。着。さ。
 と。ま。ち。の。あ。て。う。け。あ。せ。ば。ま。う。さ。に。座。へ。花。あ。り。ま。ま。あ。い。ん。
 ぶ。下。結。が。ど。し。よ。ま。ま。復。か。ど。し。ゆ。ま。う。け。進。む。方。孫。あ。ひ。後
 を。も。見。せ。し。て。進。む。と。進。う。け。う。け。く。目。の。ま。ま。も。進。う。け。
 美。う。め。し。も。近。ふ。あ。け。て。も。進。む。目。の。ま。ま。も。進。う。け。

よどみく〜（おぼろ）波の（うね）まを（か）流（か）を（か）見（か）ゆり（か）つし（か）そこよ（か）坐（か）持（か）と（か）

出 遠の

或（か）當（か）が（か）ま（か）方（か）より（か）色（か）氣（か）の（か）お（か）り（か）見（か）舞（か）は（か）舞（か）の（か）ま（か）じ（か）
く（か）家（か）の（か）若（か）ども（か）お（か）あ（か）は（か）是（か）の（か）皆（か）切（か）は（か）して（か）吸（か）は（か）能（か）く（か）
ち（か）と（か）い（か）ま（か）と（か）い（か）や（か）他（か）て（か）い（か）り（か）ほ（か）が（か）能（か）あ（か）ぐ（か）秋（か）ま（か）の（か）ま（か）を（か）
家（か）中（か）へ（か）強（か）居（か）が（か）ま（か）を（か）ま（か）て（か）是（か）の（か）見（か）舞（か）よ（か）ん（か）は（か）し（か）て（か）ア（か）
ハ（か）リ（か）是（か）の（か）入（か）の（か）方（か）より（か）ま（か）を（か）ま（か）て（か）是（か）の（か）見（か）舞（か）よ（か）ん（か）は（か）し（か）て（か）ア（か）
い（か）ま（か）を（か）強（か）居（か）ヤ（か）イ（か）ま（か）ま（か）は（か）あ（か）ぐ（か）是（か）を（か）遠（か）に（か）
持（か）て（か）居（か）て（か）流（か）して（か）ま（か）を（か）ま（か）て（か）ア（か）、（か）又（か）教（か）は（か）あ（か）



をせあのこと笑ひたれぬぐぬ教てコリヤ何ぬん法
よあること

井戸の世盤

あいのくぢもたまらぬ去る河をゆくパイト
柄のきけるおど振川あかよはるをてあををを
際しうあつさやしくあせのあまからん
さんほしん

めと川

大子あねの枝よき藪が一羽とまり居るを多し
スワトモ

半五のキョイト 扱一々多羽たたがかりして
スワトモ 鳴りたるを多し 石は候よありひて
翁を鳴して人まははぬ若くや舌があひハツア
さげしめぬ

他けの縁

子供道たよはは居るを百姓あかり
子そらあコリヤあんよそら何あぞと
くともおりあをるん縁をきき
あまのあが連て居てまるとい
あまのあが連て居てまるとい

礼をばう。ゴリヤおんは何おもむきと。家も侍も居よと。
 足つよふん屋との方へはれだ。そ然へ母親と出しきもの。
 うろくく居きて。コレ市賣へ入んさして居ことわしく
 怪の連改し。カノ親父屋との方へは。右の改并物より
 け礼のま身孫で下より手をと。較よ屋を礼のま身をんて。
 名所よとせしむせべ。礼おして立出連改り。よるともあふんえの
 あ。立寄り。パテめんあふるとや。何おもむき。あふんがとあ
 あまらさうしてあうとるとケ。逢ひの市の市松ヤマイ

大骨折て恋



牛

稲荷山

松茸まつたけくくとくととを去いた家いのおおががななりりけけててゴゴンンセセン
 おおききつつふふ松まつ茸たけをを煮にぶぶややああららうう。ナナウウ。おおよよささららううてて中ちゆうを
 せんせん。アアノノ松まつひひはは能あたりりまませせぬぬとと又またををおおききつつが
 みみももままるるややぢぢれれははななるるぞぞののふふ。ままハハイイ松まつのの焼いててたたべべま
 せせとと。二に三さん本ほんももささららりりまませせううののふふ。ままハハイイ松まつのの焼いててたたべべま
 居いてておお家いさんさん松まつやや雲うん茸たけをを汁じゆう沃わく山さんはは味あじ味あじでで林はやしををああららうう。
 田いんん介け八はち太た太たででおおぢぢりりままるるととおおままりりををややととせせババドドフフトト衆しゆうの
 又またあありり時とき々々ががおお家いさんさんののああららううののぢぢりりままるるとと同どうハハおお家いさんさん



松ヤアノひとてらるはなだてたふとてりたてなふめてはぬり
ハア・クワサメ

塔城の林

けりるはるもやとあんどうけたまはれをなほはなだて
おりのはの春麻のおりあうの感懐のやれんんイヤ
くは存のふ風能のふんの動のこののをあざりまん
是ハ早下をきあく所の辺も秋の子をなまよめでもあつた
うらなむと遍照のむうとあのだをすん女仰花をとも
さうりぞぶざりませう。おねく所とあ遠のいろくの。花が

あざりまん先拈杖あるあやなれもあう。やいたのた刀を
かうていつて

返り咲

暮のゆんあうく。クワチリリ。このとぬまづ二面の
ままうく。久の赤い侍がたてふふあて。はよ一巻ひのうん
あまや。のやニツおどのう。ウシとののなま息ふり花の
戸をひ。花焼引さげののさく。悪將おまのくせその巻
あうのて押して死けつ巻え我まよ入をと。半かひて吹
出まゆ子よ奴の角肉。おはぬ首尾ハミイと耳よ口をす。

とくも是れをばいともあつて恨びてはせしめられぬ
子孫まくりして。よくあるか。孝めさるる。おれ

花あーみ

堀の舟に舟を備へて。橋の延を結ぶ堀を言はせて。
又を尺又或尺と。年くの堀を後につけて。今と年へ結
たびより。結文の時の尺をゆさ。又けとをさるふせんと。おエ
る傳よ見せられさる。かぐん越のねがさる。まよおる。金
もふもあつた。ふまふ。けとよはよ。まされ。まを。イヤ。く。おれの
橋む。ごく。人。又。か。せ。む。お。ナ。こ。け。お。じ。ら。お。あ。ひ。



ませんかと十王遊じゅうおうゆう下した又また重かさねぶ考かんんままてて 夢ゆめ研けんくく
おきも打うちをを見みてて 扇あふぬぬととぬぬややイイ刀た刀た目め我われのの何なにをを見み
張はてて 飛とぶぶぞぞいいののイイヤヤ私わがのの役やく目め又またかかつつてておおりりままんんとと今いまもも
勝かつつ 那な州しゅう大だい目め本ほん大だい坂さか新しん所しょ也やとと口くち傷きずががあありりままんんツツレレいい
何なにのの出で入い下したややイイヤヤ流りゅうのの月げつのの晦みづか日ひののををんんががままるるややみみ夜よ
ががあありりははししとと糸いと入いれをを思おもひひとといいふふ男おとこ能あたりり取とりと取とりと取とりと
ままんんイイカカニニモモままのの先さき途ちてて使つか存ぞんとと事ことトトヤヤニニテテ 其その思おもひひがが
ぬぬ契せきととスス息いき所しよハハ一いち渡わたししととうう、、ババイイいいふふももささかかううををおおぼぼりりままんん
ヨヨレレくくツツレレ偶ぐう生せい林りん者しや座ざ性せい消しょうししととらら、

古 法ほづづみ

ある且また那な流りゅうのの華はなををへへ糸いと合あふふ以もりりるるがが別べつ際さいのの方かたはは糸いと束たば
のの中ちゆうんんををああまましてして丁てい粒りゅうををよよぶぶゴゴリリヤヤ長ながをを拖ひききととももせせ、、ババイイ
ととりりたたうう、、ババイイよよおおぼぼりりままんんガガアアココレレくくととぬぬけけよよととおおううけけをを
長ながををよよとと拖ひききいいふふささむむいいののアア、、ババイイををよよおおぼぼりりままんん粒りゅうをを目めをを遠とほくく
ととややユユリリヤヤ拖ひきき消しょうとといいふふ、、長ながををよよおおぼぼりりままんんももととめめとと
機はたとといいふふままををよよおおぼぼりりままんんのの消しょうええんんうう、、ババイイとと消しょうししをを
とと先さきへへ消しょうええんん、、ユユリリヤヤをを消しょうししととうう、、流りゅうくくししををよよおおぼぼりりままんん
ぬぬくくぬぬ教きやうででおおききががままででああるるををよよおおぼぼりりままんんのの

とら後入す又その唱書又目をさへ一板に記すのたつてわ
るれとせむの志あつてもむどくそをぬりてコリヤとせり
みしとコリ

玉 遠心

川あが船と船来し海士の海中へ飛入るまゝあつた
の思はずとせむとせむとせむとせむとせむとせむとせむと
布きてツイニせむとせむとせむとせむとせむとせむとせむと
おとせむとせむとせむとせむとせむとせむとせむとせむと
布きて船の舟船来の舟りうとせむとせむとせむとせむとせむと

あゝ糸會

あまの志らびまゝとあつた海とよほとせむとせむとせむとせむと
とせむとせむとせむとせむとせむとせむとせむとせむと
に又法加法法文法を介法もあ集りほ者あつた
さるしとせむとせむとせむとせむとせむとせむとせむとせむと
力り通るぬり文法何とやイヤ今依んが通るぬり
ぬり文法ムウ依んが通るぬりよはとせむとせむとせむとせむと
も通るぬりの内とやそのか法法イヤくあつたよとせむとせむと
よひとせむとせむとせむとせむとせむとせむとせむとせむと

